



## 空間のたくましさ 生活のバランス

都留理子



「いま、住宅をつくるときに考えること」  
(聞き手：青木淳、ゲスト：塚田建+恩田厚以、本誌1107)。



3月の震災は非常に難しい、しかし意義のある課題を私たちに与えた。とりわけ防波堤を破壊し街ごと飲み込む巨大な津波は、「構造的な安全」はそもそも人間が設定した範囲内の安全であり、有限とならざるを得ないことを改めて認識させた。それは個々の建築の安全についても同じであり、構造的な安全は、(その内容は更新されるにせよ) 今後も設定した範囲内の有限な安全を保証することに変わりはないだろう。そのことを前提にしたうえで、今後の建築について考えねばならない。答えは早急には出ないが、街と建築のあり方、住まうということ……をより根源的に思い描いていくことが求められていると思う。

「いま、住宅をつくるときに考えること」(本誌1107)では、アーキファームのつくる住宅が外部のインフラになるべく頼らないあり方をとっており、それによって作品が強度を獲得していることが語

られている。とりわけ興味深いのは、独特な庇や太陽光発電パネル、散水システムなどのインフラ的な装置はもちろんだが、空間そのものにも自助の精神——たくましさ——が現出していることだ。このたくましさは、設計において繊細に細かく微調整を重ねていくというよりは、力強く筆をさばっていくような、潔い決められ方がなされた結果生まれているのではないかと想像した。「住宅は心地よいものであるべき」と現代はほぼ無条件に考えられているが、アーキファームが第一義としているのはこの「たくましさ」なのではないだろうか。たくましさの結果心地よいということ。難しい課題に対するひとつのヒントがあるように思った。

「Yo」(本誌1107)は、9m×9mの正方形ヴォリュームを(ケーキにナイフを入れるように)8分割し、配列し直すことによってできた、佇まいの美しい住宅である。ナイフを入れる際、1カットだけ斜

めとし、単調でない揺らぎのある空間が成立している。周辺の豊かな緑を映し込むパンチングステンレスとRC躯体の粗い表面との対比がよい。隣接する部屋と部屋がお互いに「依存」し、さらには周辺の自然環境にも広がっていく空間は何か根源に訴える魅力を感じた。

「HouseK」(本誌1107)は大きな家型の中に複数の小さな家型を配置するという唯一の法則により、内部に複雑な風景を生み出すことに成功している。「寝る」「読書する」「入浴する」……それぞれにひとつの家型があてがわれ、人の原始的な営みが視覚化される。2階の家型からは隣の家型の屋根に出られるなど、街を探検するような体験を想像させる生き生きとした空間である。ただ、切妻屋根によってもたらされる求心性が全体を強く支配していることが少し気になった。誌面から受ける印象には限界があるとは思うが、大小の家型がもつ空間的な性質にもう少

し差があった方が、内外の反転の面白さなどより明確になったように思われた。

「市川の住宅」(本誌1107)は、nLDKプランを踏襲しながら、接続の順番をわずかに変えることで、分かりきった住空間になることを回避している。1階から見上げると2階のフロアは視覚的に今にも手が届きそうなのに、そこに螺旋階段は通じていない。結果、見えているその場所をより魅力的な空間として見せることに成功している。1階上部のロフトは動線的には突き当たりにあるのだが、両開きの扉を開けば大きくリビングに開放され、どこにも行き止まりがない。螺旋階段の手摺りやロフトのはしごなど、ディテールがチャーミングで、楽しく住まれる様子が目に浮かぶ。

(つる・りこ/建築家)